

各員の名簿を
 第一が大阪、
 第二が神戸、
 第三が東京、
 第四が名古屋、
 第五が福岡、
 第六が札幌、
 第七が仙台、
 第八が旭川、
 第九が釧路、
 第十が帯広、
 第十一が旭川、
 第十二が札幌、
 第十三が仙台、
 第十四が旭川、
 第十五が札幌、
 第十六が仙台、
 第十七が旭川、
 第十八が札幌、
 第十九が仙台、
 第二十が旭川、
 第二十一が札幌、
 第二十二が仙台、
 第二十三が旭川、
 第二十四が札幌、
 第二十五が仙台、
 第二十六が旭川、
 第二十七が札幌、
 第二十八が仙台、
 第二十九が旭川、
 第三十が札幌、
 第三十一が仙台、
 第三十二が旭川、
 第三十三が札幌、
 第三十四が仙台、
 第三十五が旭川、
 第三十六が札幌、
 第三十七が仙台、
 第三十八が旭川、
 第三十九が札幌、
 第四十が仙台、
 第四十一が旭川、
 第四十二が札幌、
 第四十三が仙台、
 第四十四が旭川、
 第四十五が札幌、
 第四十六が仙台、
 第四十七が旭川、
 第四十八が札幌、
 第四十九が仙台、
 第五十が旭川、
 第五十一が札幌、
 第五十二が仙台、
 第五十三が旭川、
 第五十四が札幌、
 第五十五が仙台、
 第五十六が旭川、
 第五十七が札幌、
 第五十八が仙台、
 第五十九が旭川、
 第六十が札幌、
 第六十一が仙台、
 第六十二が旭川、
 第六十三が札幌、
 第六十四が仙台、
 第六十五が旭川、
 第六十六が札幌、
 第六十七が仙台、
 第六十八が旭川、
 第六十九が札幌、
 第七十が仙台、
 第七十一が旭川、
 第七十二が札幌、
 第七十三が仙台、
 第七十四が旭川、
 第七十五が札幌、
 第七十六が仙台、
 第七十七が旭川、
 第七十八が札幌、
 第七十九が仙台、
 第八十が旭川、
 第八十一が札幌、
 第八十二が仙台、
 第八十三が旭川、
 第八十四が札幌、
 第八十五が仙台、
 第八十六が旭川、
 第八十七が札幌、
 第八十八が仙台、
 第八十九が旭川、
 第九十が札幌、
 第九十一が仙台、
 第九十二が旭川、
 第九十三が札幌、
 第九十四が仙台、
 第九十五が旭川、
 第九十六が札幌、
 第九十七が仙台、
 第九十八が旭川、
 第九十九が札幌、
 第一百が仙台、

昨年大阪を中心として各地に労働運動が熾然な當時我北九州の工業地たる洞海湾沿岸の各會社工場主は實に畏々怖々の有様であつた、殊に入籍の如き一萬餘の労働者を使役せる製鐵所の心配は一方ならぬものがあつた、業識當時既に此處にも

▲飛火して
 を来たしたが十一月十一日朝時手裏の二面分な此日一度に給與されたが爲、何に呉れる物は貰つて置け、然し我等の運動は之れが爲に中止するものに非ずと

皆必の内には思つたやうであるが根が正直な労働者の事故、時中が騒まると其處に居られたるかの觀を争じてゐたのであつたところが之れは裏面を射する一時の鏡、丁度夕立の時の静けさの様なもので其れと前後して生れた彼等勞友會は盛んな

▲暗中飛躍を試み會長淺原君は活動寫真館其他劇場に於て労働運動の宣傳に舞々吼と揚げられたるより忽ち二千有餘の會員と抱擁するに至り其後今日ては

ひ時に壓迫的に出づる単珍から監視の眼は炯々たりであるが會長の意志は石よりも堅く飽色初志の貫徹に努むべく奮闘を續けてゐる、野くところに依

世界のうわざ
 ■英國のデオン、アトキンス君は、ウォルトン、オシターミスの郵便配達夫として、四十二年間働いた彼は就任當時から左手を失つてゐたが、立派な義務を果した

▲辛辛イ赤
 昨年、英國クロナイクから約四十万磅の金を産出した。此の寶庫は創業以來、四千萬磅の貴重な金庫を提供したが、未だ今彼も四千萬磅位は大丈夫、得られる見込である。

▲印度のチラパンチは「雨の都」として知られてゐる。雨の多いこと世界一で、年から年中、殆んど降り續けに降つてゐる。其の雨量は年に平均六四吋、即ち五十呎、一週間に約一呎の割合である。

て容れられずんば最後の手段として或は一齊にサボタージの行動をとる事があるかも知れぬ云々と

○要求を
 式に則り、月五位の等級を別、職短縮を希望し、一製鐵の時

▲一渦千里に加入
 の進捗状態を取りたるがこれが目下之が創設の東京を中止し、職工の氣勢俄然再興し目下の動搖正に山崩らんとして風潮に満つるの概あり人心悔々たるものあり

●蒲園から突出した黒い手
 全身眞黒々
 戸棚町の巡査番所に進入り込み、より蒲園を引摺出し高射で

より夫しが越、那は製

會員、一齊に激を飛ばし、當日、同派を自せらる製鐵所中央機

のあり

一昨、三月、午後三時、下關市、戸棚町の巡査番所に進入り込み、より蒲園を引摺出し高射で

No. 10
 取 9年 / 月 / 日
 取 9年 / 月 / 日
 名紙 ()
 名紙 ()

うわさは事實
勞友會

八幡製鐵所職工を以て組織した勞友會の幹部某が最近、福岡市海岸通の某料理屋に出酒色に耽溺し居る噂既報しが聞く所に依れば會長淺原君は二十一日突如八幡君に召喚され、尚事が注意を受け、厳しき説教を受けたるより、忽ち二千有餘の會員と抱擁するに至り、其後今日ては